

言語発達と外国語学習

広島大学大学院 西 田 正

はじめに

外国語教育における早期学習あるいは海外での FLES 運動は、単に従来の学習開始年齢を下げる試みだけでなく、いろいろな面で特徴を持つ分野である。本論は、言語発達と外国語学習との関連で、早期外国語学習研究の変遷を概観し、内在する問題点の指摘を試み、さらに、Nuffield Language Project の内容と方法を考察するものである。

I 学習者としての大人と子ども

早期学習の根拠を求める研究は、長年に亘り、言語学習者としての大人と子どもとを比較検討し、その結果から学習開始の最適年齢を設定する試みをなしてきた。子どもが言語を習得する速さは、bilingual な環境で古くから観察されており(④: 203)、子どもの直感的な能力を認める主張もあった(⑩: 53)。言語学習に関わる特殊な能力は存在するか。存在するならば、それは何か、また年齢の増加に伴ないどのように変化するか、という疑問は早期学習の研究者にとって重要なテーマであった。Penfield と Roberts (⑨: 245) は、大脳生理学に立脚した論を展開している。彼らは、年齢の異なる失語症患者を観察した結果、言語学習を司る言語野は年齢とともにその柔軟性を失なうと、大脳の言語機能の面から主張した。この言語野の可塑性が、子どもの特殊な言語能力と考えられてきた。

しかし、この考えに対し、子どもの言語習得の潜在的能力が、外国語の短期習得に関するよりは、むしろ学習環境が好ましいために、子どもが容易に学習をしているように見えるにすぎない、とする主張がある。bilingualism に対し常に批判的な M. West (⑬: 94-97) と同様に、Ausubel も、本来、言語学習は概念の習得までを含み、子どもが概念の習得が困難であるが、大人は母国語での概念形成が可能であり、外国語を聞く際に新しく概念を形成する必要はないと述べ、早期学習に懐疑的である(②: 421)。

さらに興味深いことに、これら Penfield を中心とする子どもの言語能力を肯定する派と、West に代表される言語学習の環境や学習を促す社会的要因を主張する派との対立が現在まで継続している。T. Scovel (⑪: 245-253) は、子どもは大人よりも外国語を容易に習得し、ことに母国語から干渉を受けずに外国語の音声を習得するが、これは単なる言語学習の無意識的学習、事物と言葉との直接連合などの学習方法からでは十分に究明できず、大脳生理学的特性“nature”により初めて説明できるとする。この反論として、多言語使用地域では高年齢で L2 や L3 を学習し始めるが foreign accents は観察されないという報告に基づき、言語学習の“nurture”を主張する論がある(⑥: 237-243)。

以上の考察から、学習者の内的要因と外的要因のいずれを重視して大人と子どもを比較するかにより、早期学習の賛否両論に分かれ、それが現在でもなお平行状態にあり、明確な解答が与えられていないことがわかる。

II 外国語学習の発達の側面 — 比較実験研究

上記のような広い立場での大人と子どもの比較研究をやめ、言語学習の狭い側面で両者を比較する必要が出てくる。換言すれば、学習の一面、例えば、発音、語い、文などのテストを年令の異なる被験者、あるいは、学習開始年令の異なる学習者に実施し、その結果を比較検討する方法である。

発音(articulation)の比較は、方法が容易であることもあり、従来多数実施されている。Asher & García (①: 334-341), Kirsh (⑦: 399-400), Larew (⑧: 203-206)らの実験によれば、学習の長さと同比例して発音はよくなるが、年令の増加に反比例するという結果が導き出され、Penfieldらの主張を一応肯定している。しかし、聞き取り、語いの面では、学習効果は年令の増加に伴ないよくなっていく(⑨: 237-245)。

これら一連の比較実験は、一般的な両者の傾向を理解する上で重要ではあっても、実験期間、被験者の数について妥当性に欠けている。また、言語学習が種々な心理的特性の発達と密接に結び付いているために、同一な状況で大人と子どもを正しく比較検討できるかどうか疑問の余地が残る。

III 子どもの言語と興味の中心 — Nuffield Language Project

Nuffieldの言語研究は、フランス語教授の実験の一部門である。1963年に開始されたイギリスの早期外国語実験は、8才児にフランス語を導入する試みに加え、教員養成と教材開発の部門を備えた総合研究である。8~12才用の視聴覚教材を作成する教材開発部門は、基礎研究として、学習者の文法と興味の中心をCREDIFと共同で調査研究した。

- 1) 言語の記録 Nuffieldの言語研究は、子ども達が日常使用している言語を録音し、分析する方法を採った。イギリス南東部に住む8~12才の小学生250名を被験者を選び、3人から成る少年、少女、男女混合の3種の小集団を作り、学校で彼らの言語を記録した。録音に際して、子ども側の自然さと自発性を失わないように配慮し、“uncontrolled interview”と“free play (psycho-drama)”の形式を採用した(⑤c): 3)。前者では、自己紹介や身近かな話題から入っていき、集団内で40分間諸々の話題について話し合う。後者の方法によれば、集団が設定した場面でいろいろ想像をめぐらし発話する。
- 2) 言語の分析と分析結果 同言語研究は、spoken languageを記録し、Hallidayのcategory grammarを参考にし、言語を記述分析した。以下、言語分析の結果を若干検討する。

Code Number	Type of Clause and Example	
01	$\vec{S}P$: I will	561
09	A : Yes	131
34	$\Delta^d \vec{S}P$: when he comes	85
08	Z : Geography	41

(⑤a): 28)

上図は、分析された1000のclauseを型と頻度により分類したものである。これによれば、 $\vec{S}P$ 構造が全体の約半数を占めている。そして‘yes’とか‘no’などのAだけの文が多く、 $\Delta^d \vec{S}P$ (従属節)、次にZ groupが続き、この4種のclause-typeが全体の82%に及んでいる。

Code №	Sub-class at h and Example.	S	Z	C ⁱ	C ^e
04	Singular noun: "house"	16 (2%)	26 (24%)	38 (25%)	93 (35%)
05	Adjective: "small"	1	0	48 (30%)	0
19	Singular personal pronoun: "I"	377 (56%)	9 (8%)	2 (1%)	41 (14%)
20	Proper name	17 (2%)	20 (19%)	8 (5%)	19 (6%)
21	Plural personal pronoun: "We"	167 (24%)	10 (9%)	1	29 (10%)
22	Plural noun: "houses"	10 (1%)	12 (11%)	9 (6%)	50 (17%)
		588 (85%)	77 (71%)	106 (67%)	232 (82%)

(⑤a): 33)

上図は、nominal groupにおけるhead wordの分類である。Sの要素として、'I'のような単数人称代名詞、'We'のような複数人称代名詞が多い。Zの要素には、単数名詞、固有名詞の順に多い。Cⁱ(intensive complement group)では、形容詞、単数名詞が多く使用され、C^e(extensive complement group)としては、単数名詞のhead wordが高い使用頻度を示している。

Formal item	Structural position	'Paragraph'										Totals
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
programme	h in Ci								1			1
	h in Afpc								2			2 3
puncture	h in Ce							4				4 4
punctures	h in A solo pc							1				1
	h in Ce							1				1 2

(⑤a: 57)

上図は、word単位でまとめた表の一部である。図から、どの単語がどの位置で使用されたかが明らかになる。例えば、'programme'はThere's a programmeのように、Cⁱ内のhead wordとして、'puncture'はI find the puncture.のようにC^eのhead wordとして、それぞれ発話されている。

Nuffieldの情報交換の相手であるCREDIFは、家庭でもフランス語を記録した以外は、Nuffieldと同一な研究方法を採用している。両研究は、言語の記述、分析から、会話における学習者の興味を明らかにしている。CREDIFは、34の興味を中心に識別した。そのうち主たる話題は、家庭生活、学校生活、屋外での活動、個人的興味である。さらに、少年や少女が最も頻繁に扱う主題は、学校での勉強、教室活動、テレビや映画についてであることが判明した(③: 3)。

以上概説したNuffieldとCREDIFの研究は、外国語学習の研究、とりわけ早期学習の研究にとっていかなる意義を持っているだろうか。一口で言えば、言語発達と言語学習とをより密接に取らえ、教授面に一步接近したことである。両研究が文法を対象として、従来の使用頻度に基づく語彙調査では得られない言語の'permanent'な面を追求した点、また教材作成の際に必要な言語材料を、子どもの発話に観察される興味の中心から明らかにし、学習の動機づけを強化し、児童中心の学習、あるいは場面中心の学習を可能にしようとする点、さらに、子ども同志、子どもと大人との会話の中から問答の形式を調査する点などは、学習者の言語発達と言語生活とに基盤を置く教授を実施する意図の表われであろう。しかし、この言語研究にも、記録の状況により、

使用文法や話題が限定されやすい欠陥があり、子どもが活動する多くの場面で彼らの発話から "extralinguistic material" を収集する必要性が指摘されている(⑤ b: 12-13)。

おわりに

言語心理学の新しい研究成果を外国語教授や学習に応用するには、幾多の検討を経なければならぬだろう。しかし、NuffieldとCREDIFのアプローチは、今後の外国語教授、学習の研究にとって、示唆に富む試みである。

(注)

- ① Asher, J. J., & Garcia, R., "The optimal age to learn a foreign language," MLJ 53, 5, '69.
- ② Ausubel, D. P., "Adults versus children in second-language learning: psychological considerations," MLJ 48, 7, '64.
- ③ CREDIF, Enquete Sur Le Langage De L'Enfant Francais (Nuffield Occasional Papers No. 20) '66.
- ④ Gatenby, E. V., "Second language in the kindergarten," ELT Selections 2 (Oxford U. P.) '67.
- ⑤ Handscombe, R. J., a) The First Thousand Clauses: A Preliminary Analysis (Nuffield Occasional Papers No. 11) '66.
_____ b) Topics of Conversation and Centres of Interest in the Speech of Eleven-and Twelve-Year-Old Children (Nuffield Occasional Papers No. 8) '67.
_____ c) The Language of Eight-Year-Old Children (Nuffield Occasional Papers No. 1A) '64.
- ⑥ Hill, J. H., "Foreign accents, language acquisition, and cerebral dominance revisited," LL 20, 2, '70.
- ⑦ Kirch, M. S., "At what age elementary school language teaching?," MLJ 40, 7, '56.
- ⑧ Larew, L. A., "Optimal age for beginning a foreign language," MLJ 45, 5, '61.
- ⑨ Penfield, W. & Roberts, L., Speech and Brain-Mechanisms (Princeton U. P.) '65.
- ⑩ Politzer, R. L., & Weiss, L., "Developmental aspects of auditory discrimination, echo, response and recall," MLJ 53, 2, '69.
- ⑪ Scovel, T., "Foreign accents, language acquisition, and cerebral dominance," LL 19, 3 & 4, '69.
- ⑫ Tomb, J. W., "On the intuitive capacity of children to understand spoken language," The British Journal of Psychology, 16, Part I, '25.
- ⑬ West, M., "Bilingualism," ELT 12, 3, '58.